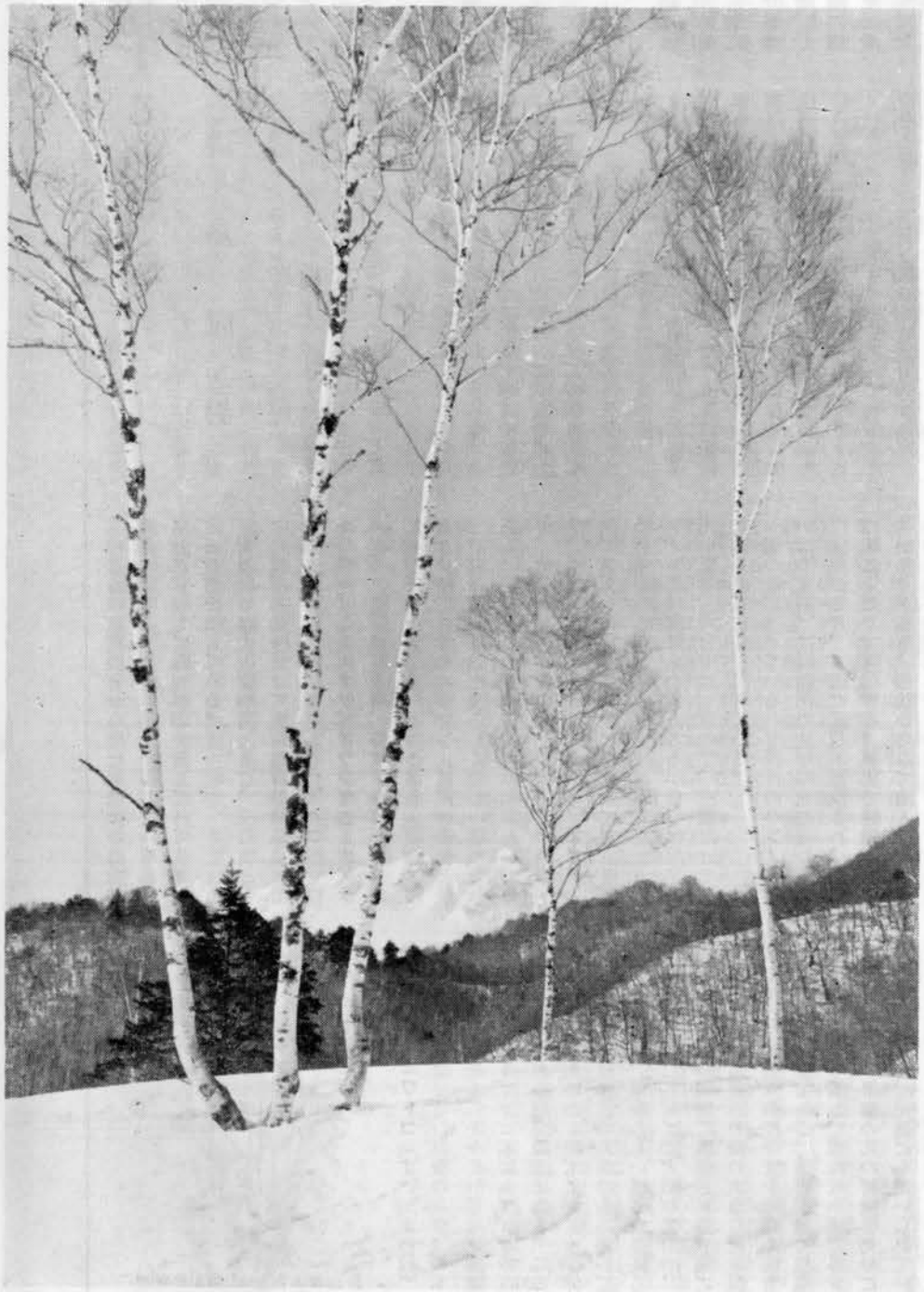
① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第10巻　第2号　　1965年2月25日　　大町山岳博物館



黒四ダム解放

関西電力では昨年に引き続き、本年は四月二十日から黒四ダムの見学を一般に解放する、一般解放といっても交通費の大町―扇沢間のバス代大町トンネルトロリーバス代併せて往復一千百円がかかる。考えようによっては秘境黒部谷が日帰りで歓賞できるのだから安いが一般の定期バス賃に比較すれば高いという見解も起きる。昨年度の黒四ダム見学者は十五万人。本年は二十七万人のお入来が推定される。利用されるバス会社、宿泊業これに附随した食糧品店、土産品店など間接に受ける利益は大きい。

この頃姫川温泉の一旅館経営者が人口の同じ位いな糸魚川市と大町を比較し、なんといっても黒四ダムを持つ大町市の観光は強いといった。灯台元暗しで関係のない人には受ける利便の解明はむづかしい、夏冬を通ずる年間観光産業が成りたちそうな現況はやはり黒四のおかげである。本年の大町―扇沢間のバス運転は大体十一本、トロリーバスの乗車券発売取扱いは前年の不評を取り戻すべく検討中と聞く、受け入れ施設は大町温泉郷へ更らに六戸、葛温泉はそれぞれ増改築。本館が提唱した針ノ木自然園はカモシカの自然放牧が中央で検討されている。美しき自然、これを科学する施設の充実、国際観光地への格上げはこんなところから出発するものらしい。

（大町観光協会専務　古川　潔）

冬から春に胎動する植物

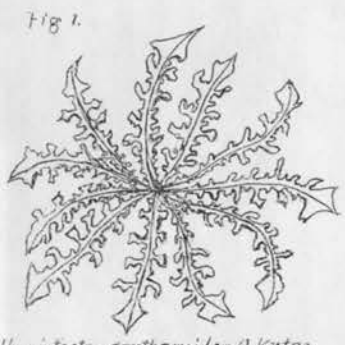
寺島虎男

「冬来りなば春遠からじ」と云う言葉がある。それ程春はわれわれにとって待ち遠しいものである。冬の間は植物が大方落葉したり地上から姿を消したりするが、この期間に養分を有効に活用し、貯えたエネルギーを来るべき春に備えている。この休眠期を発芽、発葉、開花に至るまで営々として努力を傾けている姿は誠にいちらしく思うのである。殆んど枯死してしまったかに見えてもよくよく野外に注意深く観察してみると、例えば帰化植物で**オオイヌノフグリ**は碧青色の愛らしい花を咲ふせて春の魁をする野草であるが、既に十月頃芽生えていて、日当りのよい堤防などでは既に二月頃には開花し始める。正月の床を飾る盆栽梅の添え植えに福寿草などと共に**フキ**のとうを用いる場合も稀ではない。このフキのとうは申すまでもなくフキの花で、仔細に検してみると一個の花でなく、鱗葉に護られた花序の集団で二月頃ふっくらした頭を地上に現わし、寒気にもたゆまず雄々しく育ってゆく。花のよく開いたものの中には、帯黄白色のものと帯紫白色のものの二種があり前者は雄花、後者は雌花、キク科で雌雄異種は珍らしい。山では「倒れ木をふまへ下りるや蕗の沢」といった光景にしばしば出会うことがある。一五〇〇米辺の高地では七月中旬頃残雪の消えた跡、最初に生気を示すのがフキのとうである。フキ属は世界北半球に約二十種余あり、フキは日本特産種である。

三月の終り頃から四月にかけて咲くスミレの種類には**コスミレ**、**ノジスミレ**、**ツボスミレ**、**タチツボスミレ**等があるが、既に若い芽は二月頃に出来ている。**アオイスミレ**や**タチツボスミレ**では寒さの烈しい冬には地上の葉は僅かになり、暖冬には沢山みられる。とに角葉は生き残っているのである。

冬の寒さと乾燥は多くの生物にとってはこの上なく住みにくい時で、これから体を護るには最小限に表面積を小さくして寒さや乾燥に堪えられるような体制のものに生命を托し住みにくい体を捨てゝしまう。この例として諸所の水田にみられる**ナズナ**、**タネツケバナ**、**キツネアザミ**等がそれで、葉が放射状に地面にはりついたような姿体で、所謂ロゼット型である。庭先から広く野外に生する**スズメノカタビラ**は小形のいね科であるが、晩秋から元気よく茂り、小花を附けて越冬している。また川端などに多い**イヌコリヤナギ**、ネコヤナギもフキと共に早春の魁（サキガケ）をして穂型の花を雌花雄花と別株に生ずる。ネコヤナギの姿ほど美しい春の情緒を感ずるものはない。猫の毛のような雄花の苞から出た絹線状の白毛は観賞に価する。南面の陽光を浴びている部分は急に膨脹して先端が北を指していて生きた磁石の用をなしている。

Fig 1.



Hemistepta carthamoides O.Kuntze.
キツネアザミの葉　ロゼット型

安曇野では大方雪の消える二、三月頃ともなれば、陽光を受けて次第に春の野草は開花を競い初め、**ノボロギク**（帰化）**ハコベ**、**ウシハコベ**、**ミミナグサ**、**オランダミミナグサ**（白花）**ヤブタビラコ**、**コオニタビラコ**、**ミツバツチグリ**（黄花）**カキドオシ**（淡紫）**ホトケノザ**、**ムラサキケマン**（紅花）等色とりどりに開く姿は誠に愛らしく美しい眺めでもある。正月七日の頃の中に春の七草としてセリ、ナズナ、ゴギョウ（ハウコグサ）**ハコベラ**、**ホトケノザ**（コオニタビラコ）**スズナ**（菜）**スズシロ**（ダイコン）を入れて邪気を掃う行事があるが、松本平ではゴギョウとホトケノザ等は間にあわぬところから、代用品を用いたり、今日では七草の二、三種だけで済ませる略式に変ってきている。

田の畦に残っているハゼ掛けの**ハンノキ**（かばのき科）は両性花で前年の秋に枝の先端に雄花ができ、下部に雌花が形成され、三月に葉に先だって開花する。穂状で樹脂の為全体が粘りがある。形状からみて地人は**ザンザ**の木と呼ぶ。枯木に着いた花のようであり、これがこの頃の一大特色で、白梅、紅梅も同様である。ハンノキの垂れ下った雄花が赤味を増し延びてくると花粉が黄粉となって飛び散る。この頃雌花もみずみずしくなり、受粉態勢ができてくる。目立たぬ花ではあるが寒い北風の吹き通る早春に開花する代表的植物といえる。社叢等に目を転じると、樹陰の雪の消え間に**シュンラン**が淡緑色の唇弁を開き清純な趣を感じさせられる。

早春の低山帯で人の目につき易いものを挙げてみると、**ニワトコ**（すいかずら科）がある。「春立てば芽ぐむ垣根のみやっこ木我こそさきに思ひそめしか」これは散木集後頼の歌であるが、ミヤッコ木はニワトコの古名、タズノ木の呼名は空洞の意である。この歌のように冬芽があらゆる樹木に先立って伸び、枝の節々から鮮緑色の丸味のある芽が二個づつ並んで生じ、早春らしい感じを与える。また**キブシ**（きぶし科）は大形の低木で、雷は前年の初夏から葉腋に準備される。葉に先立って三、四月頃黄色の鈴のような花を沢山穂状につけ、「春なれやキブシの花も咲きにけり」といった姿である。雌雄別株で雄株は多数の黄色花を下垂し、雌株は小花で多少緑色を帯びている。早春の花の特徴を充分にもち早春の香り高く、花道にも用いられている。雪深い信越国境をなす小谷村山地に多い**マルバマンサク**は落葉低木でマンサクに似るが、葉に特色あり、半円形で扇形か先端が凹んでいるのもある。花弁は四枚の長い組状で元まで黄色で捩れ、小枝に春甲合せに着き、大変奇妙な花である。日本海沿岸の山地に分布する。これと前後して、**コブシ**、**タムシバ**いずれもくれん科で六弁の白色花を開き、春の訪れの遅れるこの地域に春の香をただよわせる。タムシバは花弁の下に小葉の無いことでコブシと区別できる。

Fig 3.

Eranthis pinnatifida Maxim.
セツブンソウ　×½

渓畔に到ると樹陰下にコウヤワラビ、クサソテツ、イヌガンソク続いてゼンマイ、ヤマドリゼンマイ等のシダ類が鱗片葉ゆたかに冬の装いで小首かしげて現われ、シダの魁をする。コウヤワラビは春にまず実葉を出し、後に裸葉を生するが、クサソテツ、イヌガンソクは春に裸葉、秋に実葉が出てくる違いがある。正月の花として盆養に鉢植えに愛好されるフクジュソウは温室によらねばならぬが、積雪量の多い安曇村島々や稲核の奥の沢にこれを見出すのは大抵五月中旬頃になろう。寒気に堪え忍んできここの草の自然の姿に接すると如何にも高貴を感じる。野生は石灰岩地を好み、春の芽をみるとどんなにか大きく生長するかと思われるが、夏の草姿は想像以上に貧弱である。セツブンソウは産地が比較的少く、松本の広沢寺山、諏訪の横川の上流等筑摩山脈に見出しているが、急傾斜地の樹陰を求めて繊細な姿で簇生していて、五～一〇

糎のか弱い茎の頂に、深く裂けた羽状葉を茎と垂直にひろげて、特有な形をなし、その中心に花梗を延ばして、梅花に似た白い五弁の花被を開く。花が南関東の暖い山地では二月の節分の頃に咲くところから命名されたが、甲信地区では凡そ四月初旬頃でないと見られない。全く春の序曲といえる銘花である。葉の細かく裂けるエゾスミレの花もこの頃である。ちょっと風変りした野草にカンアオイというものがある。この名は花が冬から春にかけて開くことによる。花か蕾かわからぬような暗赤色の花で花弁はなく、三箇の肉質のガクで、下部は壺状をしている。特殊な花なのでカンアオイ科という独立した科になっていて凡そ四十余種もある。本土では関東及び中部地方に多く、武蔵野の多摩丘陵にはタマノカンアオイと称する特産がある。また北陸系のコシノカンアオイは葉が一個で、花筒の内面に十五箇の縦条があり、網目状をなす。北安曇小谷村の県境乙見峠並びに湯峠に分布している。ウスバサイシン、フタバアオイ等もこの仲間で花期を同じくしている。カタクリも矢張り早春の花の一つであって、山地の木陰に四月早々やゝ長い二葉の間から細長い柄をのばし、紫色の六弁の美しい花を開く。沢山群生した様は見ごとであるが、たまたま疎在している時、「片栗の花とは知らず見過ぎけり」(漂舟)の歌のように全く見のがしてしまう事も往々ある。雪が消えるのを待ちわびつゝ陽光を浴びてイカリソウ、ジウニヒトエやアマナ、チゴユリ、アマドコロ、ナルコユリ、ホウチャクソウ(ゆり科)やニリンソウ、キクザキイチリンソウ、エゾイチゲ、シロガネソウ(うまのあしがた科)等の植物が後に続いて頭をもちあげ山にも早春の訪れを感するに充分である。また低山の疎林の下半日蔭に落葉をかきわけて現れ出るものにヒトリシズカ、フタリシズカの二種があるが、仲々魅力的でやさしく愛らしい。四月頃ひっそりと静かに純白の穂状の花が咲く。その名のとおり、穂状花一本をヒトリシズカ、二本をフタリシズカという。共に美しいというよりも渋い風情を眺める草である。

亜高山帯から高山帯即ち深山の草木の開花は低地に比べると大ぶ遅れる。高山の植物には秋の訪れは驚く程遅いのに春の巡りは極めておそい。かって六月の初旬に上高地を尋ねた事があったが、中の湯附近釜隧道出口には圧雪が高さ二mも積っていた頃、上高地に入ってみると日蔭の森林中には諸処に相当の残雪があり、融雪直後の道路はジメジメしていた。肥沃な陰地に育つカツラの冬芽は長だ円形で、枝に平行して密着し、その紅紫色の鱗片が際だって美しく目を楽しませてくれた。樹型は裸子植物のイチョウに似ていて葉に先だって裸花を咲かせる。梓川の西岸に花の魁をしたのが、エゾムラサキ(むらさき科)で空色のワスレナグサによく似た優しい花を多数つけて沿道を埋める様は、全く我が世の春と誇るに充分だった。カンアオイ、ミヤマアオイ、ニリンソウ、フツキソウ、キバナノコマノツメ、エゾタチツボスミレ、イブキスミレ、ハイシキミ、イワカガミ、オオヤマカタバミ、ミヤマシグレ等は森林内に、水際にはチャルメルソウ、タガソデソウ、ハシリドコロ、ラショウモンカズラ、ツルキジムシロ、ツルネコノメソウ等が花を既にもち、雪融けと同時に早春の訪れをみた訳である。梓川を挟んで両岸に目立って多いケショウヤナギは相当の太さになると、小枝の殆んどが赤くやわらいで異様な感をもった。これは落葉後初冬から翌年四月頃まで続き、芽がほころびる期に及んで自然と消えるようである。南安高家区熊倉河原のケショウヤナギも同様で誠に興味ある生理上の問題といえる。

昨年五月末に白馬大池駅に下車、ワラビ山早大ヒュッテを経て神の田圃まで行った事があるが、西方近く乗鞍岳、大日岳(小蓮華)の白雪をバックにオオシラビソに囲まれた湿地帯は雪が消えた直後とあって一面に枯草に被われて荒涼たる中にひっそりと静まっていた。その環境の中に小川の中や縁に沿ってリウキンカ(うまのあしがた科)の黄花、それにも増して一段と目を楽しませてくれたのはミズバショウ(てんなんしょう科)の白苞で春の魁のナンバーワンともなろう。開花後に葉が現れ、大葉は一mにも達する事もある。その他ショウジョウバカマ(ゆり科)は淡紅色に、オオヤマザクラ(エゾヤマザクラ)も一株は淡紅色にボツボツ咲き出していたり、湿地にはイワイチョウ(りんどう科)やモウセンゴケ(食虫植物)等も芽を出していた。

高山植物の生育に大切な栄養、生殖の生理作用が行われる期間は大体六月から九月までの凡そ三ケ月間である。然し種類によっては早くから始って早く終るものや、その反対のものもある。高山上では五月の声をきいてもなお時には狂う日があり、冬の状態を脱しない。然し六月ともなれば、次第に雪よりも降雨が多くなり、晴天の日には強く日射を受けて、冬山の装いの雪の衣は日毎薄くなってしまう。山の肌も諸所に露われ始める。そして南斜面の暖い所では、早くも高山植物の生活の胎動が始まるわけである。 (塚原高校)

山の詩歌碑

福沢武一

牧水歌碑

——北佐久郡立科町タテ科牧場——

白樺湖畔のホテルで昼食をすませた。バスの発車まで時間つぶしに裏山へのぼった。秋の花が咲きはじめた草山。

尾根に立つと、まともにそびえるのは蓼科山。反対側には、——霧ケ峯のスロープが鮮かに輝き、その先に美ケ原の山陵が横たわり遠まきに南・中・北アルプス連峯が大きな弧を描いていた。裏峡に光るのは落合の小さな家立ちだった。

晴々したパノラマをあかず眺める。蓼科山の手前にうねる台地、——そこには植林の条目が読みとれ、バス路がその間を縫っているその先の方、台地が視線からはずれようとするあたりに光っているもの、それが牧場の建物と知れる。

バスは山腹の路をうねって走る。カシワの林をぬける。ヤナギランが赤紫色の花を綴っている。牧場入口前で下車。キャンパー、ハイカーで賑々しい。売店で牧水歌碑の所在をたずねる。それは赤い屋根の建物の裏手の傾斜地。予想に反して石塁の石などではない。大きな自然石を台座にして、一メーター半の碑石がすえられている。残念なのは、自然石とはいいながら、面が思いきりあらすぎる。

一歌は、

見よ旅人
秋も末なる山々のいただき白く雪つもり
来ぬ　牧水

例の牧水調の書体が四行に刻まれている。下手なようで、味があって、だから上手なようで、でも上手とはちよっといえない、——これが牧水独特な筆致。

この作品も——小諸懐古園、佐久市岩村田ののと同じく、明治四三年、小諸滞在期の一歌。発刊したばかりの雑誌「創作」の編集に疲れると共に、恋愛問題が妙にこじれ、当時の牧水は耐えきれなくなっていた。編集を一切佐藤緑葉にゆだねて旅にでた。中央線で入信し、小諸に足を入れたのは九月初め。土地の文学青年たちと盛んに交歓した。佐久の山野を歩き廻った。信州の山河は牧水の心を魅了したのだ。かくて九月が終り、十月がすぎ十一月ともなると、奥山には雪が来た牧水は自の心にいいきかせずにはいられなかった——見よ、旅人よ、お前がこうしている間に高山にはいつしか雪が白々とつもる季節になってしまったのだ。……自然の推移に驚く一方、焦燥にかられる彼だった。彼はやっぱり一ときの旅人としてここの滞在者にすぎなかったからだ。他にも理由はあろうけれど、いたたまらない心にもかられて上京したのは十一月十六日。ちょうど二ケ月間の小諸滞留だった。こうした当時の牧水その人を如実に語っている主題歌は極めて印象的だ。

碑には銘はなにもない。傍に建て添えられた標識によると、主題歌の筆蹟は大正十四年四月、揮毫旅行の途次に、当高原北端の上の平に滞在中のもの。第二歌集「路上」には秋の末なるとある。秋もは改作であったことが察せられる。昭和三十二年九月末、当牧場に短歌会が開かれ、牧水の末亡人喜志子氏が出席。その時の末亡人の詠

ふくらかの立科山のたち姿佐久の花野に
すそ引きのべて

この一歌が牧水歌碑の並びに大きな自然石へ刻まれた。二つの歌碑の除幕式は翌三十三年六月一日に催された。末亡人の碑の方は岩の一箇所を彫りくぼめ、とぎすまされた面に刻まれている。いかにも整っている。けれど、うれしさにはかける。

スケッチ

長野県の昆虫

ギフチョウとヒメギフチョウ全1冊

著者　藤沢正平　木下睦美　北村文治
倉田　稔　水上英男
規格　A5版　横組　上質紙
頁数　カラー写真　一頁　白黒写真　九頁　木文　百十二頁　図版多数
定価　三百円　送料　四十円
申込先　長野県大町市　大町市立第一中学校　倉田　稔

博物館ニュース

秋父宮記念学術賞にかがやく

秩父宮記念学術賞第二回授賞は市立大町山岳博物館に決まった。

同記念学術賞は秩父宮殿下が、生前ご経験とご興味をお持ちになった「山」に関する科学で顕著な成果を挙げたものに対し、人文、社会、自然科学を通じ、一年一件に授賞するもので、第一回は京都大学にある生物誌研究会が昭和37年から39年にかけ行なった「ネパール、ヒマラヤにおける学術的調査研究」生物誌研究会長芦田譲治博士の授賞について第二回目で、「山に関する科学の進歩についての著しい貢献」に対して、市立大町山岳博物館が決まったもの。

三月一日、国立教育会館で、県市長、藤巻館長らが出席して、秩父宮妃殿下から授与される。

表紙説明

春先の鹿島槍

撮影　山本携挙

山と博物館　第十巻第二号
一九六五年二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円（送料共）大町山岳博物館宛お送り下さい。